日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

愛はαにしてω
――マルコ伝12章28～37節――

１９６５年４月25日
小池辰雄

幕屋の志気　聴けイスラエル　神を愛する　贖罪愛　愛の引力　聖霊の愛　愛は完全の帯　隠された愛　愛のキリスト　愛は一切を被う　愛の磁石　神の愛の業

【マルコ12・28～37】

28学者の一人、かれらの論じおるを聞き、イエスの善く答え給えるを知り、進み出でて問う『すべての誡命のうち、何か第一なる』29イエス答えたもう『第一は是なり「イスラエルよ聴け、主なる我らの神は唯一の主なり。30なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」31第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより大なる誡命はなし』32学者いう『善きかな師よ「神は唯一にして他に神なし」と言い給えるは真なり。33「心を尽くし、智慧を尽くし、力を尽くして神を愛し、また己のごとく隣を愛する」は、もろもろの燔祭および犠牲に勝るなり』34イエスその聡く答えしを見て言い給う、「なんじ神の国に遠からず』此の後たれも敢えてイエスに問う者なかりき。35イエス宮にて教うるとき、答えて言い給う『なにゆえ学者らはキリストをダビデの子と言うか。36ダビデ聖霊に感じて自らいえり「主わが主に言い給う、我なんじの敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」と。37ダビデ自ら彼を主と言う、されば争でその子ならんや』

●幕屋の志気

大変、春らしい気候になりましたが、ここに臨んでいらっしゃる方がかなり少ないので、私はどういうことかと思っております。自分のことを言ってはおかしいですが、世の中の事情も違うでしょうけれども、私は藤井先生につき始めて五年間、一回も欠席なしに先生の仆れるまで学びました。

ここに出席するしないは、それは事情によっていろいろでございましょうけれども、意気込みというものは、それにもかかわらず、うつってくるんです。たとえ欠席していても、その人が本当に意気込みをもって、その集会に対する祈りを持ち、愛を持っているならば、それは感ずる。そうでない何か第二義的なことでゴタゴタしていると、それも言わず語ら

ずのうちに響いてくる。

どうか、そういうことのありませんように。それは決して戒めとして私は言うのではない。私たちのこの福音を受けていて、そういった態度はあり得べからざることだと私は思っている。聖霊ということが決して観念化ではなくて、自分の生命の生命である、根源であるということになりましたならば――人間ですから、いろいろ癖があったり、欠陥があったりいたします――けれども、それをいつも自分で乗り越えては進んで行く、その姿というものは出てくるはずなんです。

どうか、皆さんは、そういう意味で、進んでいただきたい。時々申して、申し訳ありませんが、

「もしそうでなければ、私はいつでもこの集会は閉じます」

と申し上げているわけです。論より証拠で、人間の魂はごまかしがききませんから、本当の生命をいただいていなければ、その人はどんなに工作をいたしましても、結局、それは本当の救への道にいかない。いつも、あなた方は第一義のところに心をすえて、魂をすえて、直進していただきたい。なかなか、人間は直進できませんが、電光形でもいいですけれども、その跡をたどってみると、やはりそれは直線になる。そういう気合でやっていただきたいと思うわけです。

こないだの復活節にいたしましても、私はあれくらいの集まりの復活節は今までもったかもたないか知りませんが、何はともあれ、このキリストの甦りの生命をいただいて感謝しているこの私たちが、

「何とかして復活節には出たい」

と、それは工夫ができるはずです。担架に乗っかっても、屋根をぶちわってキリストに救いを求めた病人もいるようなことです。ラザロを甦らせたキリストの生命ですから。単なる記念日ではないので、特別にそういった意味において、もっと幕屋の志気というものが、意気というものがあがっていいのではないかと思った。

●聴けイスラエル

18節から27節までは、特殊な問答のことがあります。復活のことにも関係していますが、そこは一応とばしまして、28節からです。今日は、聖書のうちのきわめて大事なところの一つです。

28学者の一人、かれらの論じおるを聞き、

「学者」というのはもちろん「教法学者」でして、旧約の律法に詳しい学者です。

イエスの善く答え給えるを知り、進み出でて問う

自分の方が高びしゃに出ているわけです。

『すべての誡命（いましめ）のうち、何か第一なる』29イエス答えたもう『第一は是なり「イスラエルよ聴け、主なる我らの神は唯一の主なり。30なんじ心を尽くし、精

神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」

これは、言うまでもなく、申命記の中の言葉です。

「4イスラエルよ聴け、我らの神エホバは唯一のエホバなり。5汝心を尽くし精神を尽くし力を尽くして汝の神エホバを愛すべし。6今日わが汝に命ずる是らの言は汝これをその心にあらしめ、7勤めて汝の子等に教え、家に坐する時も路を歩む時も寝る時も興る時もこれを語るべし。8汝またこれを汝の手に結びて号となし、汝の目の間におきて誌となし、9また汝の家の柱と汝の門に書き記すべし。」（申命記6・4～9）

あいかわらず、ユダヤ人は今でもこのように、この

「聴け、イスラエル」

を書いて、小さな箱に入れて、額に結びつけたり、腕に結びつけてみたり、あるいは家の柱にそれを掲げてみたりしているわけです。しかし、ここで大事なのは、

「今日わが汝に命ずる是らの言は汝これをその心にあらしめ」

ということです。エレミヤ記31章をみると、

「31エホバいいたもう、みよ我イスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立つる日きたらん。32この契約は我が彼らの先祖の手をとりてエジプトの地よりこれを導きいだせし日に立てし所の如きにあらず、我かれらを娶りたれども彼らはその我が契約を破れりと、エホバいいたもう。33然どかの日の後に我イスラエルの家に立てんところの契約は此なり。即ちわれ我が律法をかれらの衷におき、その心の上に録さん。我は彼らの神となり、彼らは我が民となるべしとエホバいいたもう。34人おのおのその隣とその兄弟に教えて汝エホバを識れと復いわじ。そは小より大にいたるまで悉く我をしるべければなりとエホバいいたもう。我彼らの不義を赦しその罪をまた思わざるべし。」（エレミヤ31・31～34）

「即ちわれ我が律法をかれらの衷におき、その心の上に録さん。」

とある。申命記の

「心におき」

という言葉と、エレミヤの

「その心の上に録さん」

ということ。申命記法というのは、もちろんエレミヤの時代に神殿の中から発見された律法で、むしろエレミヤに先行すると見てよろしいものですが、そこに

「その心にあらしめ」

という言葉が既にある。「新しき契約」と言って、非常にこのエレミヤ記31章のこの言葉を重大視するわけですけれども、しかし、その核は既にこの申命記の中に書かれている。

「聴け、イスラエル」

と言えば、もうそれはちょうど「主の祈り」と同じことなんですね。「主の祈り」と言うときに、

「パーテル　ヘーモーン」（我らの父）

と言う。ドイツ語で

「ファーター　ウンゼル」

という言葉で「主の祈り」のことを言いますが。ヘブライ人にとっては、

「シェマッハ　イスラエール」（聴けイスラエルよ）

と言うと、もうこの言葉で代表して言っているわけです。

「イスラエルよ聴け、我らの神エホバは唯一のエホバなり。汝心を尽くし精神を尽くし力を尽くして汝の神エホバを愛すべし。」

と。我らの神エホバはただひとりの神である。汝、愛すべし――

「心を尽くし」

という言葉は

「全(すべ)ての心をもって」

ということ――すべての心をもって。次の言葉は「魂」とか「生命」とかいう字です。全魂を尽くして。全心、全魂。「魂」という字はしはしば「生命」という字にも使う。それから、「自分」というような言い方をするときにも使わないことはない。口語訳では「精神」と訳してある。精神というと少し観念的になってしまう。「魂」の方がいいわけです。精神という言葉そのものは、文字の一番深い意味でみれば、素晴らしい言葉ですけれども。普通、精神という言葉が多少観念的になる。

「魂を尽くし、力を尽くして。全力を尽くして、全力をもって、神を愛すべし。「愛するのだぞ」

と。ヘブライ語では完了形であって、「愛した」という意味なんです。この完了形は、断定的にものを言うときにも使う。ヘブライ語は、現在完了も未来完了も過去完了もありませんから。完了と未完了しかない。

「愛するのだぞ」

ということです。「ねばならぬ」なんて言うよりか、もう少し強い。

「愛するんだよ」

というわけです。

「今日わが汝に命ずる是らの言は汝これをその心にあらしめ」

原文には「あらしめ」とか「とどまる」なんていう語もない。

「心の上に」

と、ただ言っているだけです。「あらしめ」でも「とどまる」でも、それは訳で補った言葉

です。

「それを肝に銘じよ」

というわけだな。

●神を愛する

それをキリストは持っていらっしゃった。けれども、正直、私たちは全存在をもって神を愛するなんていうことは、なかなか、生まれつきの我々はできない。私はいわゆる無教会にいたときに、「神を愛する」と言うのだけれども、それはどのようにして本当に可能なのか、「信ずる」ということは多少できそうに思うけれども、「愛する」というのは正直、困ってしまった。

私たちは、「神を」と言うけれども、神さまの現象体がキリストですから、キリストにおいて神を愛する。キリストを愛する。

「キリストを愛する」

というと、よほど具体的になってきます。

「神を愛する」

と言っても、何か漠然としてしまう。けれども、

「キリストを愛し、キリストにおいて神を愛する」

と言うと、今度は、「神を愛する」という言葉がよほど具体的な内実をもってきますから、そういう意味において、「神を愛する」ということが可能になってくる。しかし、「キリストを愛する」ということは、もちろん、私たちが手放しで可能なわけはない。

これはヨハネ書簡をごらんになると、はっきり分かるとおりです。これも聖書の極めて大事なところです。ヨハネ第一書4章7節から、

「7**愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、**

「愛は神より出づ」というから、我々は、愛は手放しで持っていない。アガペーは神からやってくる。

おおよそ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。8愛なき者は、神を知らず、
神は愛なればなり。

非常にはっきりしている。

「ホ　テオス　アガペー　エスティン」（神は愛なり）

という。

「**神は愛なり**」

というのは、ギリシャ語をやって、一番先に出てくる文句です。ここのところに使ってある「愛」という言葉はみんな「アガペー」という字です。みんなこの「アガペー」という字が書いてある。しかしながら実は、この「アガペー」というのは、私たちは生まれつき

持っていないというわけです。

9神の愛われらに顕(あらわ)れたり。

「顕れた」という。どこに顕れたか。キリストにおいて顕れた。

神はその生み給える独子(ひとりご)を世に遣(つかわ)し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。（ヨハネ一書4・7～9）

神が私たちに生命を得しめたもうたことが、キリストにおいて生命を得しめたもうたことが、これが愛です。これは正に、ヨハネ伝3章16節と相照応する言葉です。

「16それ神はその独子(ひとりご)を賜(たも)うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。」（ヨハネ3・16）

それから、ヨハネ第一書の3章16節も同じく大事な似た言葉です。

「16主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ第一3・16）

という。「3・16」というのは不思議にこういうような具合になっている。それとこのヨハネ第一書の4章9節です。

●贖罪愛

「10愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥(なだ)めの供物(そなえもの)となし給いし是なり。」（ヨハネ一書4・10）

贖罪愛ということをはっきり言っている。一言でいえば、贖罪愛である。福音書において証(あかし)されているところの全キリスト、これにぶつかりまして、その実存に驚嘆し、その御言に圧倒され、

「その十字架の贖いの血、その復活の喜びの音信、やがてお前たちに聖霊をつかわすという確実なる約束」

こういった全キリストにぶつかりまして、キリストの愛に圧倒されるわけです。

「キリストという愛」

ですよ、

「キリストの愛」

と言ったって。キリスト即愛です。神即愛です。これは即なんです。属性ではない。本質なんですから。愛は何か他の徳目と同じものではない。アガペーという愛は神の本質である。神の義、神の聖というものは、非常に本質的なものではありますけれども、

「神は聖である」

ということは、我々には関わりない。神は聖である、我々は穢(けが)れである。これはどうにもならん。大きな溝があって、隔てがある。「神は聖である」と言ったって、我々には喜びがこない。

「神は義である」
我々は不義でだめだと。これも喜びはこない。
「神は愛である」
というときに、愛というものは、働きかけるところの何ものかである。人間が根源意識において一番求めているものは愛なんです。根源意識で一番求めているものは生命であり、一番求めているものは愛である。愛は同時に生でもある。本当の生命は、上からくるところの愛を持ったものである。甦りの生命というのは、この愛の生命である。愛は属性ではない。
「神は愛なり」
というのは、
「神は愛に満ちている」
とか、
「神の一番大事なものは愛である」
とか、そんなことを言っているのではない。「神は愛なり」とは
「神＝愛」
で、イコールなんです。神は愛である。キリストは愛である。その愛は私たちを根底から喜ばし、根底から生かす。我々が絶言絶慮の一番奥のところで求めている何ものかというものは、この愛である。それを我々に与えてくださっている。しかもそれは絶対無条件です。絶対無条件に与えてくださっているところの愛です。その絶対無条件に与えてくださる愛をすら受けないというのが、この人間の罪の深大なものです。それに逆らっている。
「一番大事なものを――人間が与えることのできない、この世のいかなる立派な素晴らしいものも与えることのできないもの――その存在の一番根底となるものをやる」
と言うのに、
「それだけは要りません」
と言って、この福音を拒否しているのがこの人間というわけだ。バカもはなはだしいものだ、本当は。

●愛の引力

もう、問題ないですよ。キリストはもの凄い神の現象体ではないですか、太陽みたいではないですか。もの凄い光と力と生命と、一切に生命を与えているこの太陽は即ちキリストのシンボルである。
「我は葡萄の樹」
とキリストが言われたが、

「我は太陽なり」

と言われてもいい。けれども、そうすると、妙な太陽神みたいなものができてしまうから、困りますけれども、そうじゃない。太陽神は、他の宗教にも、エジプトにもある。

しかし、それを突き抜けて、本当にキリストという霊的人物に、霊的人格にぶつからなければダメです。「霊的」を入れなくてはいかん。無教会で私は「人格」ということは聞いていたけれども、この「霊」が生命なんだから。ギリシャ語を見ると、「御霊」なんて書いてない。みんな「霊」と書いてある。日本語に訳すときに「御霊（みたま）」なんて訳すけれども、パウロもただ「プニューマ」と言っている。

この霊的人格に、イエス・キリストにぶつかって、この福音書に来て――

「分かるの分からないの」

ではないですよ――その前に全存在をもって降参する。絶対無条件降伏だ。このキリストにぶつかったら、もうたまらないです。キリストの愛が燃えてくる。

太陽だって、何か中心があって、グルグル回って動いているんでしょうが。地球も、何か中心があるから、みんな中心に向かって引力で、何か物が落ちてくる。「落ちる」のではなくて、吸いつけられるわけだ。「落ちる」なんていう言葉は本当は間違いだね、吸いつけられるわけです。みんな引きつけられる。リンゴは地面に引きつけられる。さすがに、ニュートンは信仰があるよ。その現象において、いつも信（真、心）の世界から現象を見ているから。

やはり、地球の中心と同じように、キリストという光熱体にぶつかって、我々の中心に、キリストにその引力で引っ張られる。

「キリストは私を愛する」

ということは、

「キリストは私を引っ張る」

でいいわけです。

「キリストは私を引っ張りまわしている」

と言った方がいいですよ。私を引っ張りまわしているキリストの引力は愛の引力です。愛とはそのような力あるものです。力があるんです、霊的な力が。「霊力」と言うと、ちょっと語弊がありますけれども、正に霊力を持っている。霊力を持ったところの愛が引っ張っていて、そして、私の中心に、あなた方一人びとりの中心にこの愛というアガペーという本質的なものを植えつける。ここに置く。これが聖霊です。

●聖霊の愛

キリストは、この本質であるところの愛を与えたくてしょうがない。だから、キリストが与えるときには、全存在をもって与えたのがこの贖罪です。私たちの中にはそれを受け入れないところの余計なものが、生意気なものがたくさんあるから。この生意気なやつを

みんなぶっとばしてしまう。そのぶっとばしたのが即ち贖罪です。いろんな衝動をもった自我というやつが抜かされてしまった。自我がぬけてしまった。自我というのが「罪」ですから。

この自我中心が抜けたから、今度は――自我中心のやつは「天動説」なんて言って威張っているわけだ――今度は「地動説」になって、「コペルニクス的転向」というのが始まる。そうすると、キリストの聖霊の愛が、愛の霊というのがこの中心になります。もはや、この関係なくしてはありえない中心ですから。これを切ってしまったらダメです。そういう、引っ張りまわしているところの中心です。

これは絶対関係です。絶対関係における中心というものは、キリスト中心、神中心に動くところの中心です。これが即ち、本当の愛。この御霊の愛が、愛の御霊がここにこのようにして来たら――自分というものがすっ飛ばされて、ここに入って来たらば――それで初めて、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、愛せざるを得ない」

という角度になってくるわけです。

「愛せざるを得ません。それでなければ、私には生命はありませんよ」

と、はっきり言えるようになる。

「性格は決して変わらない」

と言うが――人間の性格には変わらない悪いものがあるよ――けれども、そんなものはもう一つ乗り越えて、自分をやっつけながら進むだけのことになる。その気合が出てこなかったならば、

「福音を受けとっている」

とか、

「信仰している」

とか言ったって、

「それが何だ」

と私は言いたくなる。運命・環境を、いろんなものを本当に支配していくところのバイタリティーは、御霊のキリストをいただくことにある。この御霊のキリストの愛がここに来たらば、

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして主なる汝の神を愛せざるを得ない」

という私とさせられていく。

「キリストとの本当のレリギオ（再結合、宗教）を持て、本当の関係を持て」

ということです。関係は観念していることではない。具体的なものです。

こないだから、行為とか何とか言うけれども、この力が来たら、このようにして受けとることを信という。愛のキリスト、愛の神を受けとることを信という。そうしたらば、活

動せざるを得ないんです。

キリストの愛に私は泣きたいくらいです。それを、

「小池先生がどうのこうの」

なんて言って、出ていくやつは出て行ってくれ。どうでもいいよ、そんなことは。出席している人に、私はこんなことを言って申し訳ない。けれども、私の気合はそういうところにあるということを、皆さん、しっかり受けとってもらいたい。

「小池先生に失望した」

と言うやつは、やめてもらうよ。いいよ、失望して。僕なんか見ていれば、失望する。やめたらいいよ、そんなのは。私の中にあるものは、私の如何に拘らざるところのものです。その気合が分からなかったら、何の福音かと言うんだ。私は妙な雑音を聞くものだから、残念です、そういうことは。何のために私たちは、この何年間、私はこのような集会をしているか。皆さんが本当に、

「この福音のためならば、先生が福音を棄てても、私は行くぞ」

というくらいの気持で進んでいただきたい。私は君たちの魂を本当に惜しむから言うんです。

●愛は完全の帯

コロサイ書3章14節に、

「14**凡て此等のものの上に愛を加えよ、**

「愛を加えよ、愛を置け」と訳してあるが、原文では「加えよ、置け」という字がない。ただ「愛を」と言っている。

愛は徳を全うする帯なり。

「徳」という字もない。

「愛は完全の帯である」

と。「完全」という言葉がそこにある。

「しっかり、褌を締めろ」

という言葉ありますが、愛というキリストに縛せられて、キリストの愛の帯に、紐に縛せられて、それが君たちの全きだと。我々の全きであるという。エペソ書3章16節に、

「16**父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、17信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、18凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さのいかばかりなるかを悟り、19その測り知る可からざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。**」（エペソ3・16～19）

「測り知ることのできない愛を知る」

という、矛盾的な言い方をせざるを得ない。どうして、パウロがこのように絶叫的な言葉を使うか。ローマ書8章の終りがそうではないですか。ローマ書8章というのは、ある意味において、新約聖書のひとつのピークです。その終りでもって、

「このキリストの愛から私たちを離せるものは何があるか」

とパウロは言っている。どんな事態があるかと。あれだけ凄い患難にあっているパウロが、喜びの器として、力の器として、愛の器として、ついには殉教の死に至るまで、突っ走ることが出来たというのは、このキリストの愛が彼の中に本当に燃焼していたからです。この中心に光の玉になっていた。そういうパウロの書簡であり、そういう福音書です。

今のクリスチャンは、一体どんな心でこの聖書を読んでいるか。私たちはもう一遍、本当に聖書の現実というものはどれほど素晴らしい熱い世界であるか、生命であるかということに驚嘆しなければダメです。

「論語読みの論語知らず」

という言葉があるが、実は、

「聖書読みの聖書知らず」

というクリスチャンがいかに多いか。我々も決して、「これでいい」なんていうところは一つもない。限りなくその世界に進んで行く。

●隠された愛

マルコ伝にもどっても、結局、私たちはこのキリストの言葉によるほかにない。イエスは旧約の言葉をそのまま持ってきて、ただそう言われただけである。イエスの註解は何かというと、イエスはいろいろ注釈をなさらない。イエス・キリストの注釈は、彼の実存そのものなんです。キリストの言葉を捕まえようと思ったら、本当にこれを食らおうと思ったら、福音書を読むよりか仕方がない。福音書を読んで、イエスという方はどういう方であるか。それはすべて、どんなことが出ていましても、みな煮詰めてみれば、みんな愛というところに集中するわけです。

「神の怒（いかり）」

という言葉がある。

「隠れたる神」

という。イザヤ書45章15節に出てくる。あれをルターが注釈して、

「神の怒りは神の隠された愛である。愛の別な表現である」

と言っている。

私もつい今、怒鳴りましたが、しかし、それは本当に愛すればこその烈しい言葉なんです。もし、ただ怒りのために怒っているならば、それは決して幸いしない。

神さまはどういうように私たちを取り扱いなさろうとも、雷鳴の如くになろうとも、そ

の雷鳴は――

「掻（か）き裂きまた包む」

という――ベートーヴェンの第六シンフォニーでもの凄い雷が鳴っているが、あの後に静かな平和なリズムが続く。

火山は火があるから時にもの凄い爆発をきたす。しかし、その火山のわきには温泉が湧いている。我々を本当に温める。日本は火山国であり温泉国である。私はむしろ、日本のこの自然の中に、火山と温泉において、キリストの愛のあることを、その象徴のように、これを思わざるを得ない。日本人は、この国土の気候風土によって、非常に美わしい性格を持たしめられているわけです。

その根底に天来のものを入れて、この地的な恵みを本当に祝福されたものにしたいと思う。人間の与えられている一切の才能、これはみんな根底に神の、キリストにおける愛をいただき、生命をいただき、本当の霊知を――霊的な知です――霊知をいただく。

松岡君が物理学をギリギリまでやると言う。結構です、大いにやってください。それはこれが来ているから、ギリギリまでできる。根底にこの絶対次元のものをいただきながら進んで行く。物理学の中に何も福音を並行して読みとる必要はない。物理は物理として大いにやる。それが極められるという力はどこから来ているか。それはこの根源から来るんです。そして、物理現象を徹底的に解明していくことが即ち、神の大なる創造の業のこの創造の宇宙を解明することにおいて、それが知らず言わず語らずのうちに、その人が神の栄光を現していることになる。すべてそういった根源から一本ですから、何も心配はいらん。

●愛のキリスト

「汝、心（カルデア）を尽くし、魂（プシヘー）を尽くし、思い（ディアノイア）を尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛せ」

とは、

「主なる汝の神を、私にあれば、愛しないではいられない。そうでなければ、お前さんの生命はないよ」

ということです。

「そうです。私は、その意味において、『神さま』と本当に楽しく言えるようになりました」

という世界になってきたら、それは本当です。私はこの聖霊をいただきましてから、そのことが本当に分かってきました。もちろん、頭ではない。それまでは正直、いわゆる私の無教会時代においては、それがどうもうまくなかった。

それでは、その切り替わりは――キリストの愛を、愛のキリストを受けとること――それは福音書を読むというんだけれども、ぶつかるというんだけれども、しかし、それはど

こまでもキリストの中に現実に読みながら入っていくことです。読みながら入っていくということは、即ち祈りの世界、祈り心地です。祈りの心です。

キリストに親しむ。皆さん、お家の方々や親友は親しいでしょ。私たちお互いの間は本当に親しいものである。

私はドイツ語の生徒に言う。

「君たちは、ドイツ語を勉強すると思ってはいかん。ドイツ語に親しまなければいけない。ご飯を毎日いただいている。新聞を毎日読むだろう。ドイツ語は、とにかく5分でも10分でもいいから、電車の中でもどこでもいいから、開いて読みなさい。これに親しみなさい。語学の勉強というのは、その他に秘訣はない。それだけが秘訣だ」

と。親しむことです。福音の世界も同じことです。キリストに本当に親しむ。キリストは神さまを親として親しんだではないですか。

「父よ」

と言って親しんだではないですか。

「お父さん」

と言って親しんだ。見えもしない神さまに向かって、お父さんとして親しんだ。これが秘訣ですよ、イエスの宗教の。

なぜ、親しめたかというと、彼の中に父の霊が来ている。さっき言ったとおり、この霊が来て、霊と霊が一つになっているからです。地球の中心に太陽の力が来ているから、地球はグルグル回りながら回転する。

それをいただくためには、「父よ」と言って叫ぶことが既に祈りですから。一番、祈りの簡単な、そして一番深いものは、ただ

「父よ」

という一言です。私たちには、

「主よ」

という一言です。「南無阿弥陀仏」だとか、「南無妙法蓮華経」にあたるものは、

「主イエス・キリストよ」

ということ。あとは、言葉は要らない。私たちが何か危機において、「主よ！」と言って全身を投げかけたら、それは危機を脱する。守られますよ。御札（ふだ）なんか要らない。それはキリストの中に入ってしまっているから。ウワッと入るから、ここにキリストの力が働くから、守られる。

そうですよ。簡単明瞭です、祈りの世界は。なぜ、みんな難しくしてしまっているか。ちっとも難しくない。なにか難しいことを説明しなければ聖書の解釈でないような、そういった学者の言うことに権威があるかと思う。とんでもない。学者ではない。

「学者の如くならず、権威ある者の如くキリストは語り給えり」

とあるではないですか。私たちが、皆さん一人びとりが真に権威を持つためには、このキリストの御霊をいただいたら、御霊の権威というのがある。これはいかなるものもどうにもできない。自分で威張りくさるのではないですよ、この権威というのは。本当の平伏しです。

本当の平伏しに権威がくる。そこは十字架の贖罪と聖霊の受けとりとをしっかり一つにして、しっかりと魂において持っていなければダメです。また、そうでなければ、力がこないし、本当の権威がない。威張りくさってやってごらんなさい。必ずそんなものは躓いてしまうから。そんなものではない。

それで本当に「楽音（らくいん）」ではないですか。この親しみは楽しいではないですか。キリストに親しむ。もう心配はいらんと。放蕩息子と同じです。絶対無条件にキリストは自ら十字架をもって、

「来たれ！」

と言う。なにをグズグズしているか。なにも考える余地も何もないではないですか。

「ああ、そうでしたね」

と。皆さん、生きのいい人になってくださいよ。人数が少なくなればなるほど、一人びとりが本当に生きがよくなる。私は、それならいいよ。君たちがどんなに少なくなったって、それだけ反比例して生きがよくなれば、私はうれしい。また、いくら人数が増えたって、生きの悪いのがいくらいたって、それはダメだ。「生き」というのはこの

「キリストの生き」

です。キリストの生きのいい人になってください。

私は今日は、もう包み隠しなく皆さんにぶちまけて、せいせいしたよ。

「せいせいした」

というのはなにもただ、人間的な意味で言っているのではなくて、あなた方が私の気合を受けとってくださったと思うから、本当に今日の天気みたいに、お互いさま気持がいいではないですか。どうか、歯にものの挟まったような交わりなんていうものはよそうや。福音というものは、

「汝ら、熱きか冷たきかのどちらかで、生ぬるいものは吐きだす」

なんて天上のキリストがヨハネに言われたように。

●愛は一切を被う

愛のことについては、コリント前書13章の『福音書の心臓』（曠愛新書1号）に私は克明に書いたつもりですので、時々、読み返してください。どうか、こういうものは私の手紙と思っていただきたい。聖書解釈とか、解明とかいうものでなくて、私は手紙だと思っている。

私はあまり手紙を書いている暇がないから。

大事なところはさっき相当引用しましたが、なお、『曠野の愛』36号の「サマリヤびと」を読んでください。あの「サマリヤびと」（ルカ伝10章）において、ユダヤ人いわゆる正統派がダメで、ユダヤ人が嫌っているところのサマリヤ人が、あのような愛をもって旅人を慰めた。介抱してやった。

いつかずっと前にお話したことがありますが、軽井沢にいらっしゃった或る牧師さんの話です。その牧師さんが自転車に乗っていたら、後ろから来た牛乳配達のトラックに撥ね飛ばされてしまった。大腿骨をやられまして、凄い怪我です。そうしたら、その牧師さんは、そのトラックが牛乳配達をしている途中であるので、運転手が下りてきたら、

「いやいや、どうか、急いで配達してくれ」

と。もう立てないんですよ、血が流れている。

「僕には構わないでいいから、配達してくれ」

と言った。救急車が来て担ぎこんだ。警察がきて、運転手に

「お前は警笛を鳴らしたか」

と聞いた。

「鳴らしました」

と。そいつはどうも、鳴らしたか鳴らさなかったかはっきりしない。牧師さんは少し耳が遠い方だったものですから、たとえ鳴らしても聞こえなかったらしい。

「あなたは聞きましたか」

「はい、聞きました」

と。実は聞こえなかった。その牧師さんはその日のうちに出血多量で死んでしまった。しかし、自分の方で間違いを全部しょって倒れていったこの人の愛に、その牛乳配達の運転手は本当に泣き伏したという。

キリストの愛は、私たちの背きにも拘らず、私たちの傲慢にもかかわらず、惨憺たる我々にもかかわらず、みなそれを引き受けて、

「いいよ」

と言う。

「しかし、どうか、私が与えるこの生命を受けなさい。でなければ、救いはない」

ということです。イエス・キリストは、福音書に顕れているキリストは、究極において、この始末のつかない私たちに、つぐのいかたなき私たちに、全マイナスを引き受けて全プラスを、全きプラスを与える。全きプラスです。

「**愛は全き**（まった）」

という。また、

「**愛は一切を被う**」

という。一切を被うところのこの完全なるものを、それを私たちに与える。聖霊という、愛の御霊というこの完全なるものを――完全なる何ものかだ――それを与える。

「汝ら、父の全きがごとく全かれ」

とキリストが言われたのは、この全きものを私たちに与えてくださるから、おっしゃったんです。そうでなくて、誰かこのキリストの言葉に耐え得んやということです。けれども、

「はい。あなたがこの全さを私たちにくださるから、この不完全だらけの惨憺たる我のうちに、全さが、完全なるものがいただいてあります。この世のいかなるものが私を支配することができようか」

というわけです。キリストがこの神の僕となるのは、僕となりうるのは――神の命令は力をもって、全き力をもって、全さを私たちに与えてくれるもの凄いものであるから――キリストは主の僕であり、また、パウロが

「我はキリストの僕（しもべ）である」

と言ったんです。

「この罪びとの首（かしら）なる我はキリストの僕である」

と言った。僕である者は本当の自主な者であるわけです。

●愛の磁石

地球が中心をもった自主的な回転をするのは、この太陽の僕としてです。太陽の僕でなければ、地球はこのような回転はできない。我々の本当の自由無礙なる回転は、人生の歩みというものは、突っ走りというものは、イエスというもの凄い力に引っ張り回される。引っ張り回されるためには、磁性を帯びていなくては。愛の磁性を帯びている。磁石だ。

皆さんは愛の磁石ですぞ。あなた方があるところには、磁場が生じて、人を引きつける。私はクギ箱の中に磁石を入れてある。鉄のクギをしょっちゅう引っ張っている。「いいなぁ、磁石というものは」と思って見ている。磁石一つを見ても、私はうれしい。

「ああ、キリストの力は私たちをこのように磁石づけているなぁ」

と。霊的な愛の磁石ですから、引きつけるんです。

修養でそうなるのではないですよ。自分の信仰を何かにして、そうなるのではない。ダメだからこそ、しょうがないからこそ、

「はいっ」

と言って無条件にいただく。これをいただくためには、絶対無条件で何も要らん。こんな有難いことが世界中どこにあるか。どうして、クリスチャンというのは、自分を七面倒くさいものにするかと私は思うな。どうか、皆さん、その証人（あかしびと）になってくださいよ。

「こんな楽しいことはありませんよ」

と言って。そうした磁性をもって人を磁石づけて、人に磁性を与えていくのが、それが証

人です。証(あかし)するとは、本当に人に磁性を与えていくこと。それは、

「磁性がありますか。ああ、そうですか」

ではいかん。

「なるほど、あなたは磁性がありまして、私の中にも何か磁性が起きてきました」

と。それが本当の証人です。皆さん一人びとりが本当にそういった意味の証人になる将来、未来を、私は本当に信じて、君たちを愛する。

本当の愛は時に爆発するようなものである。キリストはそのようになさった。あるときは、

「エルサレムよ、エルサレムよ。お前たちを、雌鳥が雛を羽の下に入れるように、何度、私は入れようとしたけれども、とうとうダメだった。しかし、私が去るのは、お前たちに益である。やがて、今度は本当に中に入って来るぞ」

というのが聖霊です。だから、聖霊を受けないで何のキリストぞやということです。

「やがて、私はお前の中に入ってくる。そうしたら、私の言ったりしたりしたことがみんな、本当につかめてくる。そして、お前と一つになって行くぞ」

と。こないだ、復活のお話をした時にも、

「三人いれば四人だぞ。五人いれば六人だぞ」

と言った。そう数えた一人こそ大事な一人だということです。

そういうわけで、もう何とも行き詰まりを知らない人になる。それが、パウロが

「一切の秘訣を得たり」

ということです。

●神の愛の業

イザヤ書63章7節から、

「7われはエホバのわれらに施したまえる各種(もろもろ)のめぐみとその誉(ほまれ)とをかたりつげ、又その憐憫(あわれみ)にしたがい、其(その)おおくの恩恵(めぐみ)にしたがいてイスラエルの家にほどこし給いたる大なる恩寵(いつくしみ)をかたり告げん。8エホバいいたまえり、誠にかれらはわが民なり、虚偽(いつわり)をせざる子輩(こら)なりと。斯(かく)てエホバはかれらのために救主(すくいぬし)となりたまえり。9かれらの艱難(なやみ)のときはエホバもなやみ給いてその面前(みまえ)の使(つかい)をもて彼等をすくい、その愛とその憐憫(あわれみ)とによりて彼等をあがない、彼等をもたげ昔時(いにしえ)の日つねに彼等をいだきたまえり。」（イザヤ63・7～9）

という懇(ねんご)ろな言葉が畳みかけて書いてある。

「旧約聖書の宗教は義の宗教だ」

なんて、簡単に言えるものではない。愛は始めから貫いている。出エジプトが既に神の愛の業です。

「10然るにかれらは悖(もと)りてその聖霊(きよきみたま)をうれえしめたる故に、

と書いてある。「聖霊」という言葉がここに不思議に出ている。

エホバ翻然かれらの仇となりて自らこれを攻めたまえり。」（イザヤ63・10）

聖霊に逆らってはダメだぞと言って、神さまは怒ってしまった。ステパノも、

「**汝らは聖霊に逆らってきた頑ななる者だ**」

と叫んだものだから、みんなにぶち殺されてしまった。けれども、

「**彼らはその為すところを知らず、赦してやってください**」

とステパノは言って、イエス・キリストの天界に彼は上げられてしまった。あれがパウロの面前で。ステパノなくしてパウロなしとも言いたいくらいです。それでとうとう、

「何をしたか！」

というわけで、ダマスコ途上でパウロはひっくり返されてしまった。

「参った！」

と。それはもう絶対無条件降伏です。キリストの前に絶対無条件降伏。どうのこうのではないですよね、福音の世界は。

「15**ねがわくは天より俯視なわし、その栄光あるきよき居所より見たまえ。なんじの熱心となんじの大能あるみわざとは今いずこにありや。なんじの切なる仁慈と憐憫とはおさえられて我にあらわれず。**」（イザヤ63・15）

と言って、預言者は悲痛な声を15節で発している。64章1節になると、

「1**願くはなんじ天を裂てくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動かんことを。**」（イザヤ64・1）

とある。預言者たちの魂も烈々たる魂です。呑気な気持では、聖書は読めないですよね。そして、これが本当に燃えてきたら、無風のごとく、微風のごとく、大自然のごとき気持の人になりますよ。楽になる。しょっちゅう何か火山みたいに燃えているのではない。火山だって静かにしている。本当にあれは生きているのか死んでいるのかと思うくらいです。けれども、底力を持っている。

皆さんも、

「先生、大丈夫です」

と言ってもらいたいわけです。そうでしょ。大丈夫ですね。

また、ホセア書を見れば、いかにホセアが背ける者に対する懇ろなる愛をもっているか。切々たるドラマとして、ホセア書は旧約のあるひとつの特別なものです。「曠野の愛」と題して、私はこのホセア書2章のところを語ったことがある。それは今度の雑誌（曠愛新書3号『砂漠はサフランの如く』）に乗ります。では、今日はここまで。